

随 想

良い英文を書くために

—論文を英語で書くコツ (4)—

氏 家 信 久*

7. 助 動 詞

(i) Can と May

First Grader: Teacher, can I go wash hands?

Teacher: Yes, you can; but, no, you may not.

一年生: ちえんちええ, アタヒお手洗いいける?

先生: いけるよ, でもいけない。

前回に続き, またまた子供言葉の例で申し訳ないが, 何しろ子供は一番自然な speaker だから, ご容赦願いたい。さて, 上の例でお分かりのように, 英語, 特にアメリカ語では, can による may の, そして will による shall の取り込みが, ほとんど一般化してしまつた。国語, つまり英語, にうるさい人達はまだ抵抗しているが, そこはそれ生きている英語のこと, これはこのまま文法として定着することであろう。

しかし, それは英語国民のことで, 我々科学技術の徒は, そう簡単にそれを受け入れる訳にはいかないのだ。それは, 日本語では両方とも同じ“できる”になつてしまふのだが, 正統かつ伝統的な英語——我々が国際語と認めるもの——では, can は能力, 一方 may は許可であつて, 両者には, はつきりした違いがあるのである。即ち, 上例の一年生嬢ちやんは, “May I go wash hands?—お手洗いにいっていいですか? それを許されますか?” とときくべきであつたのに, それを colloquialism で Can I go? とやつてしまつたものだから, 先生は, “汝はもう6才なのだから, 当然その行為を行う能力を所有している——Yes, you can.” とのたまつたのである。“しかし”, と先生は続ける, “今は授業中だから, それは許可されない——You may not go.”

この違いは, 科学技術論文では, 時として一文の信憑性にかかわる問題となることがある。例えば,

This machine can go up to 3000 rpm.

は, “3000 rpm まではあげられる能力がある。”と言つてだけで, その後のことは全く分からない——3000 rpm になつた途端に, 壊れてしまうかも知れないのである。

つまり, この文は, 科学技術的には, 不完全である。従つて, ここでは何等かの補足が必要で, それには, 例えば,

This machine can run continuously at up to 3000 rpm.

と, continuously (連続定格) で can に may の意味を

持たすとか, または,

This machine can go up to 3000 rpm, but may not continuously run at over 2400 rpm.

として can は can, may は may で使い分ける, などの手入れをしないと, とんだ所で責任問題, 賠償問題を引き起こす種にならないとも限らないので, ご注意が肝心である。

更に, can の過去形の could は, また違つた nuance を持つので, 面倒である。例えば,

The old model could go only up to 3000 rpm, but the new model can run at over 4000 rpm.

では, 前半は旧型の過去に於ける能力で, 一方, 後半は新型の現在に於ける能力であるから, それぞれ could と can でまごうことはないが,

Can you run this machine at 3000 rpm?

Yes, I could, but I wouldn't.

の could は仮定法で, 時は現在, そして意味は, “やろうと思えばできるさ, でも would not——やりたくはないね (おすすめでできない)”。である。

つまり, could を不用意に使うと, それが過去の能力かそれとも現在の仮定か, 判断し兼ねることになつてしまふのだ。それに対しては, 能力の方を常に be able to または be capable of—ing で表現することをお薦めする。例えば,

I was able to save myself because I could swim.

は, 誤解の余地なく, “助かつた, 溺れずにすんだ。”のだが,

I could save myself because I could swim.

は, “泳ごうと思えば泳げただから, 助かろうと思えば助かつたんだが”と, 結局どうなつたんだか分からない, あいつ, ひよつとしたら, 自殺したんでは? ということになり兼ねないのである。can を could とすれば, 「できる」が「できた」になるのは確かにそのとおりののだが, それだけで済まないのが英語の妙 (妙技と奇妙の両方の意味で), 全く困つたものである。

まとめ

(1) 科学技術文書では, 現代英語の動向にもかかわらず, can は能力, may は許可と分別して使う。——can に may の意味を含ませる時は, 適当な補足 (例えば, 制限条項) を行う。

(2) 能力の can に対しては, 特に過去の could の場合, be able to か, または be capable of—ing を使う。——文章的には, 英米人の嫌う big word になつてしまふが, 誤解の生じる危険性はずつと少ない。

(ii) Shall と Will

A. I will drown; no one shall save me!

——俺は溺れて死ぬつもりなのだ, 誰にも助けさせないぞ

B. I shall drown; no one will save me!

* U コンサルタンツ, Dr. Eng.

—俺は溺れて死ぬだろう、それなのに誰も助けてくれないだろう

一方、will による shall の取り込みは、少なくともアメリカ語では、もはやれつきとした文法だと言つてよい——我々がせつかく学習した、一人称の will は意志未来で shall は単純未来、二、三人称の will は単純未来で、shall は話者の意志、という原則は、すっかり崩れてしまったのである。

しかし、話者の意志の shall の方は、多分 will では重々しさが足りないからだと思うが、法律用語ではいまだに多用されている。例えば、

A five (5) dollar parking penalty shall be paid in within five (5) days.

とあつたとすれば(アメリカで駐車違反をしたのは、もう十前も前のことで、正確な文章は忘れてしまったが)、それは単なる未来行為の予測ではなく、“ちやんと払い込まなければ、今度の免許書き替えの時、ひどい目にあうぞ”を背景にした、当局の強制なのである。

また、この種の強制の shall は、法的文書である契約書、特許明細書、各種仕様書、取扱説明書の類はもちろんのこと、それほどのものではないが、同じく公的文書である科学技術論文にもよく使われている。例えば、

To protect the heat exchanger, the feed water shall not contain more than 10 ppm of Cl ion.

と取扱説明書にあれば、それは、“Cl イオン量が 10 ppm 超となり、そして事故が起こつても、当方は一切責任を負わないぞ。”と言っているのである。また、科学技術論文で、

A. It will be observed in the figure that

Cl content shall not exceed 10 ppm.

B. It shall be observed in the figure that

Cl content will not exceed 10 ppm.

とあれば、Aでは、“Cl 量が 10 ppm 超となると、本研究の目的が失われるから、俺はそんなことはさせない(強制の shall)、ということを図で見取つて欲しい(依頼の will).”の意であり、一方、Bは、“(本研究の方法によれば、) Cl 量は(まず絶対に——習慣の will) 10 ppm 超となることはない、ということを、読者は(是が否でも——強制の shall) 図で見取るべきだ。”と主張しているのである。

このように、科学技術論文を含めた公的文書では、伝統的な英語の will と shall の使い分けは、文意を明確にする手法として有効であるから、今後とも多用されて行くと思われる。英語を科学技術上の国際語とする我々は、もちろんそうすべきである、というのが、私の結論である。

まとめ

(1) 現代英語では、shall が will に食われつつある——いや、もう既に食われてしまった、と言つてよい。従つて、英文を読む時は、will の二重性格にご注意願いたい。

(2) しかし、その現代英語でも、法的文書を始めとする公的文書には、伝統的な用法——第一人称では、will は意志、shall は単純未来、第二、三人称では、will が単純未来、shall は話者の意志——が、今後とも多用されるであろう。従つて、科学技術論文を書く我々としては、shall と will を使い分け続けて行くべきである。